

平成10年度厚生科学研究

子供家庭総合研究

前川班「要観察児童等いわゆるハイリスク児の育児支援及び療育体制の確立に関する研究」

分担研究「学童期の療育指導の在り方」 分担研究者 小西行郎

研究協力者 矢倉資久

奈良県立高等養護学校（前県立教育研究所）

学習障害（LD）児の実態及び保護者のニーズについて

要約： 教育相談における学習障害児のアセスメントを行った結果、乳幼児期にことばの遅れがあったり多動であったりしたことが多くみられ、対象児の描いた人物画は稚拙であるとともに社会生活能力も低い傾向にあった。同時に、教育相談の主訴に関係する保護者の教育的ニーズをまとめた結果、ソーシャルスキルに関する教育的ニーズが多かった。

見出し語：障害児、学習障害（LD）児、ソーシャルスキル

1 はじめに

我が国における学習障害（Learning Disabilities；以下LDと略記）児等に関する社会的認知は、Table 1「我が国のLDに関する対応の推移」に示すとおり1990年に「全国学習障害児・者親の会連絡会」が発足したときからであるといえる。1991年には、「通級学級に関する調査研究協力者会議」の中間報告においてLDについて認知され、1992年の協力者会議のまとめにおいてLDの概念がでてきた。そして、1995年の「学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議」の中間まとめにおいて、文部省としてのLDの定義が示され、LD児等に関する公的教育的支援について現在検討されている。

Table 1 我が国のLDに関する対応の推移

1980年代	◎LDについての啓発 学会レベルでのシンポジウム、ケース報告、調査始まる。
1990・2・11（平成2年）	◎「全国学習障害児・者親の会連絡会」が発足。
1990・4・25（平成2年）	◎衆議院文教委員会にて、文部省が初めてLD児の研究に取り組むことを明らかにする。
1990・6・25（平成2年）	◎「全国学習障害児・者親の会連絡会」が文部大臣宛に要望書提出
1990・12（平成2年）	◎「全国学習障害児・者親の会連絡会」が各親の会の会員に対して「LD児・者のアンケート調査」を実施する。
1991・7（平成3年）	◎「LD児・者のアンケート調査」の結果をまとめる。 学校での特別な教育的配慮の必要性を小学生の親430名中93.0%、中学生の親165名中90.9%の者が感じている。
1991・7（平成3年）	◎「通級学級に関する調査研究協力者会議」の中間報告において、文部省が初めてLDを認知する。

1992・3	(平成4年)	◎1991年度から4年間国立特殊教育総合研究所で基礎研究始まる。
1992・6	(平成4年)	◎「通級学級に関する調査研究協力者会議」のまとめにおいて、「通級の充実方策について」まとめるとともにLDを取り上げ文部省において初めてLDの概念がでてきた。
1992	(平成4年)	◎「学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議」を設置。
1993・4	(平成5年)	◎「日本LD学会」が発足。
1993・4	(平成5年)	◎通級による指導が公に認められる。
1995・3・27	(平成7年)	◎文部省は1993年度からLD等に関する先駆的な教育の試みを検討するため、全国に10校の調査協力校を指定する。「指導方法の実践的な研究」が始まる。
1995・7	(平成7年)	◎「学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議」の中間報告において、LDの定義、指導内容、指導方法、実態把握の方法、指導形態等についてまとめる。
1996・3	(平成8年)	◎「教科学習に特異な困難を示す児童・生徒の類型化と指導法の研究」を国立特殊教育総合研究所が特別研究報告書として発行。
1996・4	(平成8年)	◎「学習障害(LD)児等理解に向けて」のリーフレットを文部省が平成8年3月下旬に25万部作成して、小・中学校の教員に対して理解、啓発を行う。
1997・4	(平成9年)	◎「学習障害(LD)児等の指導 みつめよう一人一人を — 学習上特別な配慮が必要な子供たち —」 平成7年の調査研究協力者会議の中間報告等をもとに、LD等の指導に関する基礎的・基本的事項について解説し、指導内容・方法等についての要点をまとめた冊子を文部省が発行。

LD児は、その認知発達に偏りをもつために、学習や行動面に様々な特異症状をもつ。そのため、米国やイギリスにおいてはLDに関する基本用語として、学力障害(Learning Disorders)、学習困難(Learning Difficulties)、学習方法の相違(Learning Differences)、知覚・認知に問題がある子(Perception Cognition Child)といった用語が用いられている。

上野らは、WISC-R知能診断検査(以下WISC-Rと略記)から情報処理方略の特性を捉え、それによって類型化し、指導類型のタイプを試みてきた。それらのタイプを整理すると次の四つになる。

- ① 言語性LD(verbal type) : 主として言語能力に欠陥をもつ、聴覚-音声回路型タイプ。
- ② 非言語性LD(nonverbal type) : 主として非言語性(視覚・空間)能力に欠陥をもつ、視覚-運動回路型タイプ。
- ③ 注意・記憶性LD(attention memory type) : 主として注意集中力や短期記憶能力に障害をも

つタイプ。

- ④ 包括性LD (global type) : 特定の領域だけでなく、全体に部分的障害が混在する、いわば分類不能タイプ。

また、教育指導上からの分類として、上野は認知特性をもとに行動観察などからつまずきのみられる能力特性を5つのタイプに分類している。(Table 2)

Table 2 LD児の能力特性の分類

① 学力のLD (読み、書き、計算の障害) (academic skill disorder) 医学的定義：世界保健機関のICD-10とアメリカ精神医学会のDSM-IV
② ことばのLD (聞く、話す能力の障害) (speech and language disorder)
③ 社会性のLD (ソーシャルスキル、社会的認知能力の障害) (social skill deficit)
④ 運動のLD (協応運動、運動企画能力の障害) (motor disability)
⑤ 注意(多動)のLD (注意の集中、持続力の障害) (attention deficit)

Table 2の①～⑤の能力特性は、相互に複雑にからみあっているLD児が多い。例えば、計算に関する処理には脳の多くの領域や能力因子(注意、記憶、知能、空間的能力、言語、抽象化等)が複雑にからみあって機能しているため、計算の困難さは読みや書きなどの言語の問題、不器用さなどと独立して現れることはほとんどないといわれていることから推論できる。なお、筆者の臨床的経験からは、読み、書き、計算の障害とソーシャルスキルの障害を併せ有するLD児が多い。そこで、筆者がかかわった保護者の教育的ニーズを把握してLD児の能力特性の実態をまとめた。

2 研究目的

近年、来所教育相談において学習障害(Learning Disabilities; 以下LDと略記)児の教育相談が増加しつつある。そのLD児の実態を把握し今後の教育相談及び指導に生かす。

3 研究方法と研究内容

- (1) 平成9年度の来所教育相談においてLD児と思われる児童生徒と毎月の第三土曜日の午後にLD児を対象に実施している学習会に参加している児童生徒とに実施したK-ABC心理・教育アセスメントバッテリー(以下K-ABCと略記)、グッドイナフ人物面知能検査(以下DAMと略記)、新版S-M社会生活能力検査(以下S-Mと略記)の結果について考察する。
- (2) 上記の対象児に対する生活面、学習面、行動面における保護者のニーズを把握し能力特性を考察する。

4 研究結果と考察

(1) 対象児

対象児のうち、幼稚園年長児で3名のLDサスペクト児と他の心理検査で指数がボーダーライン域以上であってもK-ABCの認知処理過程尺度が70以下の児童3名及び3学期に来所相談に来たLD児とは対象児から除外した。(Table 3)

Table 3 対象児 (N=50)

小・中 学校別 男女	小 学 校												中 学 校						合 計 人 数	
	1 学年		2 学年		3 学年		4 学年		5 学年		6 学年		1 学年		2 学年		3 学年			
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
合 計	7	1	4	3	13	1	4	1	3	2	4	0	5	0	0	1	1	0	41	9
人 数	8		7		14		5		5		4		5		1		1		50	

(2) 対象児の生育歴

乳幼児期において、ことばの遅れがあった、多動であった、人見知りはなかった、一人歩きが遅かったといった者が各20%以上いて、これらはLDの早期徴候であると思われる。また、中枢神経の機能障害をもたらすといわれている個体特性としてのアレルギー体質、放射線や抗がん剤による白血病治療、神経学的疾患としてのてんかん、出産時の障害を残す危険因子 (risk factor) としての低出生体重などはLDの原因となる要因となると思われる。(Table 4)

Table 4 生育歴 (N=50)

項 目	人 数	%
ことばの遅れがあった。	33	66
多動であった。	24	48
人見知りはなかった。	18	36
一人歩きが遅かった。	12	24
脳波 (E E G) 異常がある。	10	20
構音障害があった又は現在も構音障害がある。	7	14
視線が合いにくかった。	5	10
低出生体重児であった。(極低出生体重児一人を含む)	5	10
アトピー性皮膚炎がある。	5	10
疾患名 (てんかん)	4	8
疾患名 (ADHD: 注意多動-欠陥障害)	3	6
疾患名 (ALL: 急性リンパ性白血病の治療を受けた)	2	4
チック症状がある。	2	4

(3) K-ABCとDAMの検査結果

K-ABCにおける情報処理能力の偏りを示す継次処理尺度 (以下SEQと略記) と同時処理尺度 (以下SIMと略記) との差Discrepancyに有意差 (90%有意水準) がある児童は、43名中22名 (51%) であった。また、継次処理優位の者が11名 (26%)、同時処理優位の者が11名 (26%) であった。(Table 5)

Table 5 差 Discrepancy (N=43)

Discrepancy	9以下	11~15	16~19	20以上	SEQ > SIM	SEQ < SIM	SEQ = SIM
人 数	14	8	11	10	11	11	21

DAMの場合、生活年齢が3歳から9歳の間では発達検査としての有効性が高いので、対象児に

対して9歳までに実施した28名のDAMについて調べた。なお、DAMの採点項目は50項目あり、健常児の場合9歳までに項目のNo1～12はすべて100%の通過率であるが、対象児の場合、No9の鼻、No11のまゆ又はまつ毛、No12の衣服に関する描写の通過率は低かった。(Table 6)

Table 6 DAMにおける主な項目の通過率 (N=28)

No	項 目	通過率	No	項 目	通過率
1	頭	100	13	毛髪B	7
2	眼	100	14	首	46
3	胴	96	15	腕と脚のつけ方B	21
4	脚	93	16	指	64
5	口	96	17	首の輪郭	36
6	腕	96	18	脚の割合	7
7	毛髪A	100	19	衣服2以上	7
8	胴の長さ	68	20	両眼の瞳	43
9	鼻	57	21	眼の形	18
10	腕と脚のつけ方A	71	22	耳	29
11	まゆ又はまつ毛	50	23	瞳	0
12	衣服	29	24	足の割合	14

DAM結果におけるサイズは、高橋雅春らが人物画テストで用いているサイズにしたがって、B5判の用紙の4/5 (230mm×163mm) の長方形から、はみ出る大きさの描画を「大きいサイズ」、これより小さくて1/3 (148mm×105mm) の長方形より大きい描画を「普通サイズ」、1/3の長方形以内の描画を「小さいサイズ」とした。その結果は、28名中それぞれ「小さいサイズ」が13名 (46%)、「普通サイズ」が12名 (43%)、「大きいサイズ」が3名 (11%)であった。児童は一般に大きいサイズの人物画を描くと言われているがLD児は小さいサイズの人物画を描く傾向がある。なお、「小さいサイズ」は、①低い自尊心、②引きこもり、③無力感、④不適切感、⑤劣等感、⑥抑うつ気分、時には、⑦依存性や、⑧退行した状態を表すと解釈されるが、小さいサイズの人物画を描いたLD児にはこれらの解釈を適用することができるように思われる。

次に、LD児のアセスメントにおいて、DAMの指数は動作性の発達水準をみるためのものであるが、DAMの指数とK-ABCの認知処理尺度との間の相関を調べたところ、 $r = .31$ となった。

また、K-ABCの3つの尺度 (SEQ、SIM、認知処理過程尺度) とDAMの指数との比較において、K-ABCの各尺度の方がDAMの尺度よりも有意に高い傾向がみられた。すなわち、LD児の場合、K-ABCの3つの尺度とDAMの尺度との間に相関はみられなくDAMの指数は低く出て人物画は稚拙であった。(Table 7)

Table 7 K-ABCの3つの尺度とDAMの尺度との比較 (N=28)

尺 度	K-ABC						DAMの指数	
	S	E	Q	S	I	M		認知処理尺度
平均値	89.2			89.2			88.3	71.6
S	12.5			19.1			15.7	10.2

最 小 値	66.0	65.0	74.0	55.0
最 大 値	115.0	146.0	142.0	96.0
t 値	*** 6.59	*** 4.82	*** 5.6	

*** p < .001

(4) 社会生活能力について

S-Mにおける全体の社会生活指数（以下SQと略記）の平均値は77.6で、LD児の社会生活能力は低く、全体のSQと各領域のSQを比較したところ全体のSQに対して移動能力と作業能力とは高かった。（Table 8）

Table 8 S-Mにおける全体のSQと各領域のSQとの比較（N=50）

SQ \ 領域	全 体	身辺自立 能力	移動能力	作業能力	意志交換 能力	集団参加 能力	自己統制 能力
平 均	77.6	79.5	83.5	83.9	78.0	76.4	76.4
S D	14.2	17.3	16.8	19.3	15.8	22.7	22.8
最 小	42.0	49.0	52.0	41.0	45.0	27.0	22.0
最 大	106.0	119.0	119.0	138.0	105.0	128.0	138.0
t 値		1.44	** 3.15	*** 3.52	0.28	0.59	0.55

** p < .01 *** p < .001

(5) 対象児の能力特性

対象児童の保護者に実施した、生活面、学習面、行動面、その他の項目について「あまり遠い将来のことではなく、半年から一年ぐらい先を見越して、お子さんにできるようになってほしいと希望することや困る行動を減らしたりなくしたりしたいと思っておられることとお書きください。」に関する保護者のニーズの調査結果を整理した。読み、書き、計算の困難さとしての学力に関するニーズは49件（28%）、聞くこと、話すことの困難さとしてのことばに関するニーズは13件（7%）、注意集中や持続力の困難さとしての注意（多動）に関するニーズは20件（11%）、粗大・微細運動の困難さとしての運動に関するニーズは10件（6%）、ソーシャルスキル、社会的認知の困難さに関する社会性のニーズは85件（48%）であった。これらのカテゴリーの中で、社会性のニーズ85件は、対象児の保護者が2件はニーズとして記入していることになり、ソーシャルスキルに関する教育的ニーズが高い。（Table 9）

Table 9 親のニーズ（N=42 低学年のN=28 高学年のN=14）

項 目	件 数	低 学 年	高 学 年	全 体
【基本的生活習慣の困難さ】 ◎食事（偏食をしない、こぼさないで食べる、箸を正しく使う、椅子にきちんと座る）。 ◎洗面、歯磨き、衣服の着脱など自分で自発的にする。等		13	3	16
【読むことの困難さ】 ◎逐次読みをなくす。拗音や促音が読める。文字を間違えない				

で読める。似た文字を混同して読まない。詰まらないで読める。等	6	3	9
【読解の困難さ】 ◎文章の読解ができる。気持ちが考えられる。等	7	1	8
【書くことの困難さ】 ◎文字や数字を枠や線からはみ出さない。誤字や脱字のないように書く。ひらがな、カタカナ、漢字などきちんと書ける。文を書く構成力を身に付ける。等	10	5	15
【計算することの困難さ】 ◎指を使わないで計算できる。数の概念を身に付ける。繰り上りや繰り下がりの計算ができる。暗算ができる。計算力を身に付ける。等	5	5	10
【推論することの困難さ】 ◎文章題の質問の意味を読み取る。文章題に進んで取り組み落ち着いて考える。図形、単位、数量の理解力を付ける。等	6	1	7
【聞くことの困難さ】 ◎説明を聞いて理解できる。先生や人の話をきちんと聞ける。友達が挨拶などの声をかけてくれることに気付く。聞く力を身に付ける。等	5	1	6
【話すことの困難さ】 ◎自分の気持ちを伝えられる。周囲と調和のとれたコミュニケーションができる。その場に応じた発言をする。構音障害の改善。等	4	3	7
【粗大・微細運動の困難さ】 ◎自転車に乗ることができる。体育の時、怖がらずに何にでも挑戦する。図工など手を使う学習に根気よく取り組む。等	7	3	10
【片付けや整理整頓の困難さ】 ◎自発的に片付けや整理整頓をする。	4	4	8
【用意や準備することの困難さ】 ◎自発的に身の回りのことの用意や準備をする。(登校準備、忘れ物をしない、他人に頼らない)等	13	4	17
【注意集中や持続力の困難さ】 ◎注意力、集中力を高め課題に取り組む。落ち着いて取り組む。耐久力、持続力を身に付ける。根気よくやり抜く。	8	12	20
【自己統制の困難さ】 ◎自制心を身に付ける。待つことができる。我慢できる。泣き出さない。善悪の判断を自分でする。暴力を振るわない。等	19	6	25
【友達と遊ぶことの困難さ】 ◎仲良く友達と一緒に遊ぶ。友達を作る。等	12	2	14
【場に合った行動や協調性の困難さ】 ◎人に迷惑をかけない。授業中立ち歩かない。協力し合うことができる。協調性をもって生活する。周りの状況を見通して行動する。等	8	5	13

5 今後の課題

学習障害児は、認知過程における発達の偏りと行動的問題をもつため仲間から拒否されたり、社会的適応に失敗する場合が多い。そこで、LD児のソーシャルスキル等に関する実態把握とLD児の保護者のニーズの把握を行った。LD児の教育的ニーズに応じた教育的支援を高める指導内容や指導方法の在り方について更に研究を深める必要性を感じるとともに、教育現場においては個性を生かす教育、個に応じた教育の発展と充実を期待したい。

参考・引用文献

- (1) IEP調査研究会 1995 個別教育計画の理念と実践 安田生命社会事業団
(2) 宍戸美津子、森永良子他 1996 LD研究と実践 第5巻 第1号 日本LD学会機関誌

- | | | | |
|------|--------------|-------------------------------|-----------|
| (3) | 東京都教育庁指導部 | 1996 心身障害教育教育開発指導資料集 | 心身障害教育指導課 |
| (4) | 千葉県特殊教育センター | 1995 平成6年度 研究紀要 第80集-VI | |
| (5) | 瀬尾政雄 | 1982 特殊教育学研究 第20巻 第2号 | 日本特殊教育学会 |
| (6) | 服部美佳子 | 1997 月刊「実践障害児教育」Vol1.284 2 | 学研 |
| (7) | 藤田和弘 監修 | 1995 アメリカにおけるK-A-B-Cの実際とI-E-P | 丸善メイツKK |
| (8) | 上野一彦他 編集 | 1996 LD教育選書1~3 | 学研 |
| (9) | 北海道立特殊教育センター | 1997 研究紀要 第10号 | |
| (10) | 名越斉子 | 1995 LD研究と実践 第4巻 第2号 | |
| (11) | 高橋雅春、高橋依子共著 | 1991 人物画テスト | 株式会社 文教書院 |
| (12) | 熊谷恵子 | 1997 特殊教育学研究 第35巻 第3号 | 日本特殊教育学会 |

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約:教育相談における学習障害児のアセスメントを行った結果、乳幼児期にことばの遅れがあったり多動であったりしたことが多くみられ、対象児の描いた人物画は稚拙であるとともに社会生活能力も低い傾向にあった。同時に、教育相談の主訴に関する保護者の教育的ニーズをまとめた結果、ソーシャルスキルに関する教育的ニーズが多かった。